

私がなぜ現在の科目を選んだか

## 「理学療法学」

信州大学医学部保健学科理学療法学専攻

木村 貞治

私が理学療法士を目指すきっかけとなったのは、中学2年の時に母から何気なく渡された1枚の新聞の切り抜きの写真でした。そこには、一人の理学療法士の方が、障害を持つ患者さんに対して直接手で治療をしている風景が写っていました。私は、中学1年からバレーボール部に入り、朝は朝練、夕方まで暗くなるまで練習していて、将来のことどころか高校進学のことすら頭になかった当時ですが、医師とは異なる資格で、直接的な手技を用いて障害を有する方々の治療に関われる“理学療法士”という仕事に興味を持つことになりました。その時点で母に、“高校に行っても気持ちが変わらなければ、理学療法士の養成校を受験してみたい”と伝えたことを今でも鮮明に覚えています。その後もその気持ちは変わらず養成校に進学し、“理学療法学”のいろはから学び始めることになりました。卒業後は、東京厚生年金病院リハビリテーション室に

勤務させていただきましたが、ヒトのからだの仕組みやその障害特性、そして、治療の根拠などに関する自身の理解の低さを痛感し、入職4年目に仕事をしながら二部の工学部に通わせていただくことになりました。工学部ではヒトに関連した講義は殆どありませんでしたが、普段障害を有する方々に接している理学療法士にとっては、まさに砂漠に水を撒かれるような新鮮な毎日でした。工学部というと微分、積分のややこしい数式が目には浮かびますが、必ずしもそれだけではなく、世の中の複雑な事象をできるだけモデル化して、それをシミュレートすることにより様々な実用的な技術を生み出していく分野で、医療との繋がりの重要性を強く感じました。その後、縁をいただき平成5年に信州大学に赴任させていただいてから、早20年が経とうとしています。

今、大学案内などで私が治療をしている風景の写真を掲載させていただいております。中学2年の時に私に人生の羅針盤を示してくれた母はすでに他界しましたが、これらからの生き方を模索している若者が、その1枚の写真を見て、障害を有する人々に寄り添う仕事に興味を持ってもらえれば、天国の母も喜んでくれるような気がしています。

(川崎リハビリテーション学院昭56年卒)

私がなぜ現在の科目を選んだか

## 「看護学」

信州大学医学部保健学科看護学専攻

深澤 佳代子

はるか昔になるが、子供の頃、父方の従兄が医学部を目指して勉強する姿をたびたび目にしていた。その従兄が医学部を卒業し、レジデント研修が終わった後にアメリカに渡り、父に時々手紙をくれた。ハドソン川沿いに住んでいると書かれていたのでニューヨークからだったと思う。この頃は、漠然とではあるが「将来、人を助ける仕事をしたい。従兄の様にできれば海外で」と考えていた。

こんなこともいつしか忘れ、紆余曲折の末、看護師として信州大学病院で長く働かせてもらった。ある時、某教授の「日本の看護はアメリカに比べて20年遅れている」という言葉に現実を知りたくて、ある財団の支援を得てアメリカの一大規模病院に研修に行った。機能的で効率的なアメリカの病院における看護は素晴らしいが、国が違っても看護の本質は不変であること、

一方で特有の文化に裏打ちされたきめ細やかな日本の看護も捨てたものではないことを改めて認識した。その後もたびたび医療安全や感染管理、看護管理について学ぶためアメリカの病院に出かけた。特に1990年代後半、多くの病院が崩壊や統廃合の憂き目に遭う中、率先してクリティカル・パスを導入し院内の体制を立て直しに奔走したアメリカの看護師たちの逞しい姿を目の当たりにし、医療における看護職の役割について目を開かせてもらった気がした。

十数年前、看護職人生の後半を教育に費やしたらどうかと誘われるまま看護大学の教員となった。俄か教員であるが故に教育について悩むことも多い。しかし、海外に研修に行き自らの視野を広げることができた経験を将来の日本の看護を担う学生や教員にも味わってほしいと考え、細やかではあるが、アメリカの医療職をゲストと呼んだり、教員をアメリカの大学に同行するなどしてきた。現在の日本の医療や社会における看護の位置づけは未だ微妙であるが、自信を持てる看護職を育てたいと思う。

従兄とは働く国も職業も違うのだが、今、同じ医療の仕事に就いている。

(信州大学医学部附属看護学校昭51年卒)